

学生にとっての研究発表会

大津 晶

近年研究発表会での学生会員の活躍が目立つ。本稿は、学生会員が本学会の研究発表会に参加する意義について、いくつかの視点から考察するものである。大学院生が研究発表会に参加することで期待される効果について整理した後、最近12年の研究発表会における学生会員の研究発表の件数の推移を本部・支部ごとに集計する。集計結果から、(1)近年、学生会員の研究発表会が増加傾向にあること、(2)持ち回り開催方式が支部所属の学生会員の研究発表会への参加するきっかけを与えていること、などが分かった。

キーワード：学生会員、発表件数、持ち回り開催

1. はじめに

編集委員の三浦先生から「学生にとっての研究発表会」というお題をいただいた。そこで、初めに自分が大学院生だった頃を思い出しながら、大学院生（学生会員）が研究発表会に参加することの意義について思いつくままに述べることにする。後半では学生会員による研究発表の件数について、最近12年間の研究発表会を対象として行った簡単な分析を紹介する。

2. 私のこと

私が最初に参加したのは、大阪工業大学で開催された1996年秋季研究発表会である。実はこのとき自分では発表していないので“見学に行った”という方が正しい。たしか懇親会にも出席したはずだが、おそらく隅の方でおとなしくしていたのだろう、ほとんど記憶がない。覚えているのは、とても上手な研究発表に感動したことと、本学会の守備範囲の広さに驚いたことぐらいか。なにせ大半の発表はほとんど理解できなかった（今ではそのことに慣れただけで、分からないことについては大した進歩はない）。

自分で最初に研究発表をしたのは、その翌年97年の春季研究発表会で会場は九州大学だった。最近はかなり早い時期（学年）から発表する学生会員が増えていと感じているが、このとき私は（一貫制）大学院の3年生だったから比較的遅いデビューといえる。今思えばかなり不遜な態度の発表だったが、これは初心の緊張感の裏返しでしかなかった。このところの学生

のみなさんの発表はとても落ち着いており、質問の受け答えも実に堂々としていて感心している。

その後は毎回つぎつぎと発表をし…、となっていれば少しは良い手本であったかもしれないが、しばらく“ほどほど”の参加が続き、現在の大学に籍を置くようになってから少し参加率が下がってきていて、こちらは反省しきり。

このように私の研究発表会への関わりは特別に真面目なものではないので少々気恥ずかしいのだが、改めて「学生のときに研究発表会に参加して良かったことは」と問われれば、やはりさまざまな交流が深まったことだと答えたい。普段なかなかお話しできない先生に、懇親会やその後の二次会でじっくりとお説教をいただける貴重な機会もあったし、SSORを（実質的に）知らない世代の一人としては、半年に一度の頻度で開催される研究発表会は、分野横断的な若手研究者の交流の場としての意味もあったように思う。

3. 学生にとっての研究発表会

研究発表会の能書きをくどくどと並べ立てるのは、“いまさら”の感が無いではないが、私自身のいさか心許ない経験をもとに、学生会員が研究発表会に参加して得られる（であろう）効果について整理してみよう。

3.1 俯瞰効果

研究者としての経験が未熟なうちは（学生に限ったことではないが）、日々の研究活動のなかでつい目先の課題にばかり気を取られ視野が狭くなりがちである。そんなときに研究発表の準備をすることで、研究の本来的目的や意味、問題点などを整理することができる。つまり大局的な視点から自分の研究の“立ち位置”を

おおつ しょう

小樽商科大学 商学部社会情報学科
〒047-8501 小樽市緑 3-5-21

確認することができるわけである。そして実際に研究発表をして得られる多くの助言が、研究の深化に有益であることは言うまでもない。

幸いなことに、本学会の研究発表会で交わされる質問やコメントは、十分な“教育的配慮”をされたものが多く、険悪な雰囲気や学生が色を失うような場面というのはあまり記憶がない（熱い議論が無いという意味ではないですよ）。私は基本的に都市・地域や交通のセッションに出席していることが多いのだが、他の分野も総じて同様なのではないだろうか。

3.2 節目効果

多くの場合、大学院生は数年内に修士論文や博士論文など、ある時点における集大成的な研究論文の執筆を控えている。とりあえず目指すところへ向けて着実に研究成果を積み重ねている勤勉な学生にとっても、あるいは怠け者で面倒臭がりな学生にとっても、年2回開催される本学会の研究発表会は、前者にとってはかっこのマイルストーンであり、後者には厳格なペースメーカーであるという意味で、まことに都合が良い（長距離走が苦手だった人にはよくお分かりいただけるかと）。

筆者自身に関して言えば、間違いなく後者に属していた。締め切り直前に“キッタハッタ”して仕上げた原稿（PDF投稿が当たり前になったのはつい最近のことですよ）の糊も乾かないうちに、消印の日付が間に合うように土浦の本局へ走ったことも一度ではない。

3.3 手本効果

「学ぶ」は「まねぶ」すなわち上手を手本とする意の言葉が転じたものだそうだが、このことは研究発表においてもあてはまるように思う。研究の中身に加えて、その着想や動機、時にはまさにいま頭を悩ませている問題などが織り交ぜられ、素人にも「何が面白いのか」を伝えてくれる研究発表を聞くと、ずいぶんと得した気分になるものだ。発表の上手さはともかくとしても、現在進行形の研究の“生々しさ”が持つ迫力は、教科書のお勉強に慣れている学生にとっては強烈な刺激である。要するに“必ず我が師有り”。

前述の研究発表会初参加の際に聞いた慶應義塾大学の栗田治先生の発表は、都市施設の適切な数を決めるための数理モデルに関する研究であったが、区数（くすう）と ξ （クシー）をかけた洒落で会場を和ませながら、要領よく聴衆に分かった気にさせる巧みな弁舌に軽い衝撃を受けたことを今でもよく覚えている。その後先生が指導する学生が、ほぼ例外なく“栗田節”

で発表する様子は誠に微笑ましい。方々で“憧れる力”なるものの重要性が説かれているようだが、それぞれの分野の先達が優秀な後進を魅きつけるという好循環が定着すれば、本学会の一層の発展につながるように思う。

3.4 交流効果

通常発表会初日の夜に催される懇親会は、“名前は”よく知っている大先生と直接お話できる良い機会であり、学生にとっては少し緊張を覚える場かもしれない（そんな大先生が夢中で料理を頑張っている姿を見るとちょっとホッとする）。そういえば以前別の学会で、たまたま伊理正夫先生と学会会場の食堂で昼食をご一緒したときに、何かの拍子で私のつまらない洒落に笑っていただいてなぜか大変感激した記憶がある（幼稚だな）。

研究発表会で活躍する同年代の姿を見るのも大変良い刺激だし、健全なライバル意識は、結果的に研究分野の進展にも貢献するだろう。また特に地方支部で開催される研究発表会は、開催地に宿泊する参加者が多いことと、担当支部の実行委員のご尽力で地域性を活かした特別講演や懇親会企画、見学会が用意されていることなどから、より中身の濃い交流が期待できるように思う（そしてこれは学生会員でも十分味わうことができる）。

3.5 PR効果

本特集の主旨にはそぐわない話題かもしれないが、現実的な問題として昨今研究者としての職を得ることが難しい状況である。公募型の採用がさらに浸透すれば、“研究業績”が一層重視されるようになるのかもしれないが、一方で“人物”という評価の重要性は今後も変わらない（はずだ）。研究発表会はあくまでも研究成果を持ち寄る場であるから、就職活動を勧めるような軽々しい発言は慎まなければならないが、このことは少なくない学生会員が抱えている悩みであることも事実だと思う。

いずれにしても、研究発表会に精力的に参加し、いろいろな分野の会員と積極的に交流を深めることは、長い目で見て自分自身に決して悪い結果をもたらすことはない、ということ強調しておきたい。

ここまで「大学院生が研究発表会に参加するといいいことがたくさんあるよ！」とそそのかしてきたわけだが、学生会員の活動が活発になるのは、当然ながら学会全体にとっても喜ばしいことである。学会員の増減

は学会活動の基礎体力に関わる重要な問題であるし、実際に学生会員の積極的勧誘が学会の活動指針の一つとなっているはずである。今後少子化が進行すれば、学会間で学生会員の獲得競争が生じ、「学生会員は学会の宝」といわれるようになるのもそれほど先のことではないかもしれない（そうすると会費や懇親会費がさらに“学割”になるかもしれませんね）。

4. 学生会員による発表件数の推移

実際に学生会員が研究発表会で発表した件数の推移を調べてその傾向を分析してみよう。分析の対象としたのは93年春季研究発表会から04年秋季研究発表会までの12年間（24回）のデータである。

4.1 分析の目的と方法

この間の研究発表会の開催概要を表1にまとめた。

担当本支部の内訳は、本部10回、関西支部4回、その他の支部各2回である。なおこの期間は、2000年まで原則として春に地方支部、秋に本部で開催していたのが、2001年以降は逆になっている。

ところで、ご承知のように本学会の研究発表会は、6年間で全国を一周する持ち回り方式で開催されているのだが、このことと大学院生による研究発表の件数に関係があるのだろうか。仮説といえるほどのもので

表1 研究発表会開催概要（93春～04秋）

	開催日	担当本支部	会場
93春	1993/3/22-23	関西	京都大学
93秋	1993/10/23-24	本部	筑波大学
94春	1994/5/25-26	中部	南山大学
94秋	1994/10/9-10	本部	青山学院大学
95春	1995/3/27-28	中国四国	広島修道大学
95秋	1995/10/16-17	本部	埼玉県民活動総合センター
96春	1996/5/15-16	北海道	小樽商科大学
96秋	1996/11/7-8	関西	大阪工業大学
97春	1997/4/2-3	九州	九州大学
97秋	1997/9/10-11	本部	東京経済大学
98春	1998/5/27-28	東北	仙台市青年文化センター
98秋	1998/10/15-16	本部	日本大学
99春	1999/3/23-24	関西	大阪国際大学
99秋	1999/9/20-21	本部	成蹊大学
00春	2000/3/27-28	中部	名古屋工業大学
00秋	2000/9/27-28	本部	東京工業大学
01春	2001/5/1-2	本部	法政大学
01秋	2001/9/12-13	中国四国	岡山理科大学
02春	2002/3/27-28	関西	富山国際会議場
02秋	2002/9/11-12	北海道	はこだて未来大学
03春	2003/3/18-19	本部	慶應義塾大学
03秋	2003/9/10-11	九州	福岡大学
04春	2004/3/17-18	本部	早稲田大学
04秋	2004/9/8-9	東北	東北大学

はないが、筆者は直感的に、学生会員の研究発表会への参加に関して、自分が所属する本支部が担当する研究発表会では、他の発表会よりも発表件数が多くなると予想した。

これにはいくつかの根拠があって、まず学生会員は主に経済的理由から遠隔地で開催される研究発表会には参加しづらい。したがってより近い開催地での研究発表会に参加する動機が高まると考えた。また6年に1回（関西支部は3年に1回）開催を担当する支部の先生方が、自地域開催の時に指導学生をなるべく発表させようとするのも不自然ではない。

もちろん発表会によって特別テーマが設けられていることもあるし、共著の指導教員の都合にも影響されるだろう。逆に、なかなか行く機会がない地域だからこそ学会発表をしようとする“ませた”学生もいるかもしれないし、開催地に関係なく毎回発表する強者がいてもおかしくない。

学生会員の発表件数は、研究発表会のアブストラクト集を用いて調べた。まずすべての論文の中から発表者を特定できるものを抽出し、その発表者に[“02”で始まる学生会員の会員番号が付されており]かつ[所属大学を特定できるもの]を学生会員による研究発表とカウントした。所属支部は所属大学により一律に本部および各支部に仕分けた。

比較のため、正会員による発表件数についても同様の方法で[会員番号が“01”で始まるもの]を集計した。なお企業等に所属する会員については、所属支部を定めるのが難しいため分析の対象外とした。また特別講演や研究部会報告等も除いてある。

実際の集計作業を進めるにあたり、発表者とその所属および会員番号すべてが明示されていないものが意外に多かったが、それらの論文でも明らかに分類可能なもの（例えば「入会申請中」となっている、その著者をよく知っているような場合）はカウントしたので、この集計結果はそれほど厳密なものではないことをお断りしておく。

4.2 分析結果

対象期間24回の研究発表会について、図1(a)、(b)は正会員および学生会員の発表件数の推移を所属本支部ごとに示したものである。比較のため、本部会員の件数と発表件数の合計はすべてのグラフに細線で表示（右軸）した。

まず全体の傾向として「ホームで頑張っている」様子を確認していただけることと思う。特に99年春は

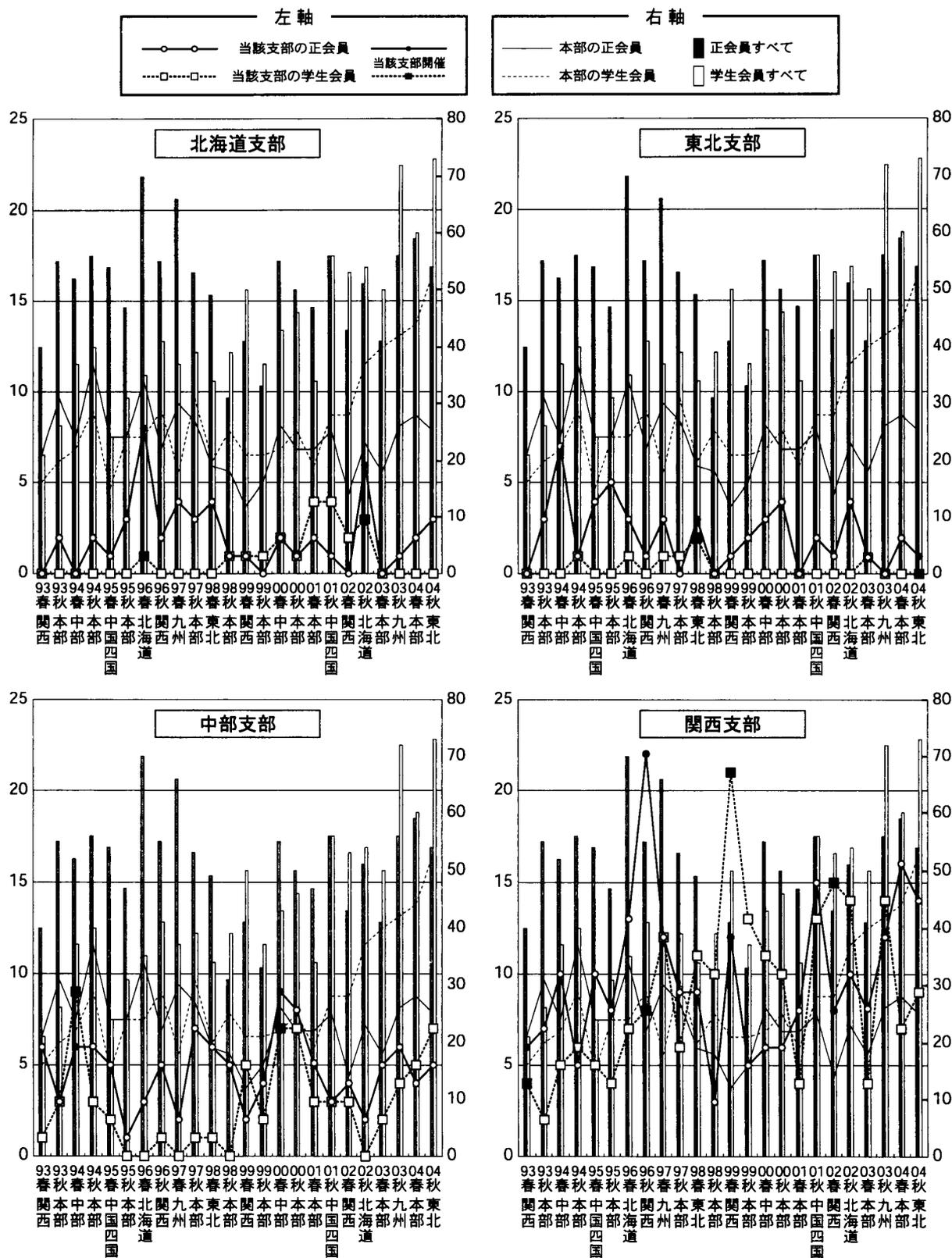


図1(a) 所属支部別会員種別研究発表件数の推移(北海道、東北、中部、関西)

関西支部の学生が20件を超える発表をしている。また学生による発表が少ない支部においても、自地域での開催が発表を促していることも分かる。今回の集計は大学関係者のみを対象にしているが、特に地方支部の研究発表会では地元の企業や自治体の会員による発

表が多数あったことも付け加えておく。

表2にまとめた所属支部別会員種別の平均発表件数を見ると、ほとんどの本支部で自地域開催の平均発表件数が他地域のそれを上回っている。さらに〔自地域平均件数/他地域平均件数〕は、多くの支部で正会員よ

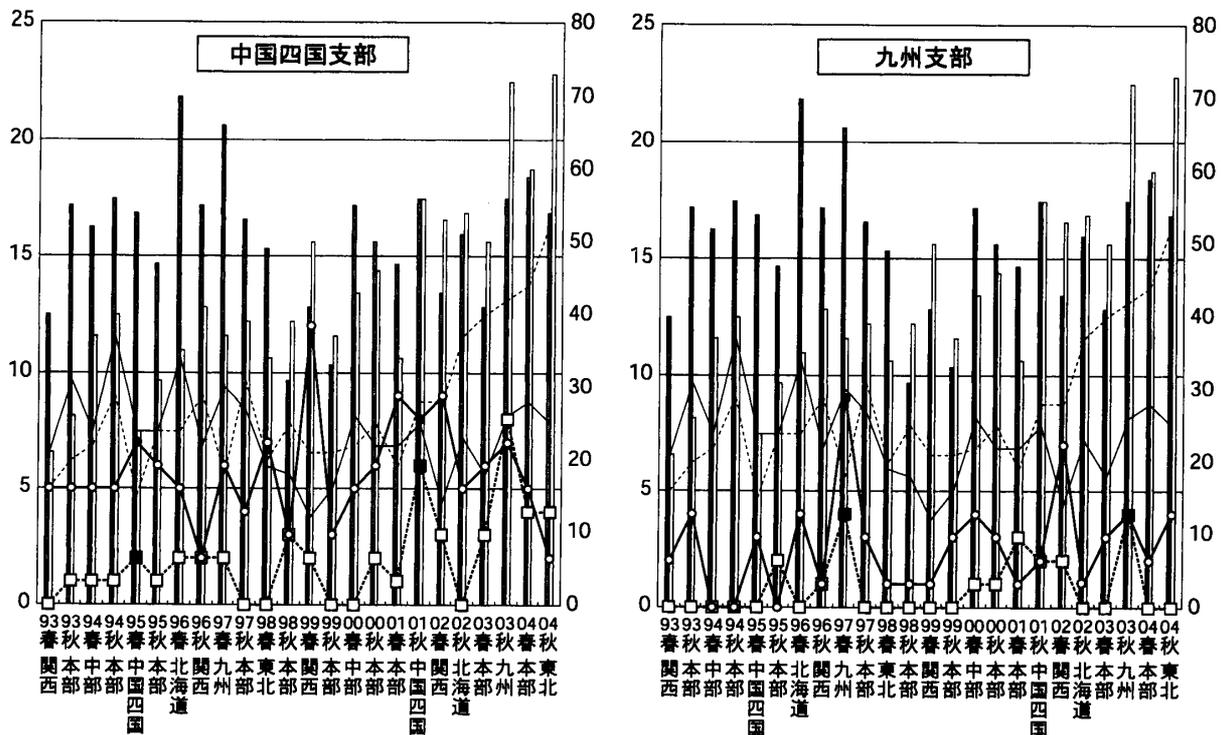


図1(b) 所属支部別会員種別研究発表件数の推移 (中国西国, 九州)

表2 所属支部別会員種別研究発表の平均件数

本支部	本部		北海道		東北		中部		関西		中国四国		九州	
	正	学	正	学	正	学	正	学	正	学	正	学	正	学
平均件数 (全回)	23.7	27.2	2.0	0.8	2.1	0.3	4.7	2.9	9.8	9.0	5.7	2.0	2.6	0.8
A:平均件数 (自本支部)	24.3	27.8	7.0	2.0	2.0	1.0	7.5	8.0	12.0	12.0	7.5	4.0	6.5	4.0
B:平均件数 (他本支部)	23.2	26.8	1.6	0.7	2.0	0.2	4.4	2.4	9.3	8.4	5.5	1.8	2.3	0.5
A/B	1.05	1.04	4.40	2.75	0.98	4.60	1.70	3.32	1.29	1.44	1.35	2.20	2.86	7.33
平均件数 (本部)	24.3	27.8	1.6	0.7	1.8	0.3	4.8	2.6	7.5	6.6	5.2	1.6	2.0	0.6
平均件数 (他支部)	23.2	26.8	1.6	0.8	2.4	0.2	4.6	3.1	11.1	10.1	5.8	2.0	2.5	0.5

りも学生会員の方が大きい。

発表件数データを、“東京か地方か”という視点から見ても面白いことが分かる。それぞれの支部ごとに、本部開催の平均発表件数と、自地域以外の地方支部開催の平均発表件数を比較すると、関西支部は正会員、学生会員ともに“脱東京”を志向しているように見える（逆に本部正会員も関西での発表件数が少ない）。また平均件数には表れないが、北海道や九州で開催された研究発表会は人気があるらしいことも分かる。

少数ではあるものの、社会人大学院生による発表も継続的に行われている。実務経験を持つ学生会員が活躍する場として、OR学会はおすすりめだと思ふ。

大澤 (2000)の分析によれば、OR 関係の大学教員

は東京に多く、勤務地のウェーバー点は八王子（夜間人口のウェーバー点は岐阜県中津川市付近）である。仮に会員の移動距離を最小化するように研究発表会の開催地を決定するなら常に関東近郊で開催することが望ましいことになるが、当然“巡業”には移動費用最小化に優先する意義があり、今回の簡単な集計結果もその一つを示しているのではないだろうか。

教員が東京に集中していれば本部所属の学生会員が多くなるのも自然だが、それを割り引いても2000年以降の本部に所属する学生会員の急速な発表件数の増加（04年秋にはなんと50件超）は注目に値する。本部の多数の学生会員が、研究発表会に引き連れられて各地で交流の機会をもっていると捉えれば、これも歓

迎できる傾向といえるだろう。

5. おわりに

実は「研究発表会への注文」も求められたのだが、思いつきで無責任なことを述べるわけにはいかない。OR学会らしい、華美に過ぎず中身本位の現在の研究発表会の雰囲気を入っている私としては、今後もそのような“手作り感”の残る研究発表会が続くことを願っている。

学生会員のみなさんには、自分の研究発表を頑張ることに加えて、他の参加者の発表をよく聞くことを助言したい。きっと研究の内容以外にも多くのことを学べると思う。またときには全く未知の分野のセッションにもぐり込むのも面白い。そしてできるだけ質問する（つもりで聞く）と良いだろう。実際には短い時間の中で、しかも居並ぶエライ先生方の前で的を射た質問をするのはとても難しいものだが、質問しようと思っただけ発表を聞けば難しい発表も少しは理解できる。どうせ近い将来、いやでも質問しなければならない座長のお役目がまわってくるのだし…。

ここ数年は春季研究発表会の期間中に、同じ会場で筑波大学、東京工業大学、慶應義塾大学、早稲田大学の4大学で共通に開設されている講義「問題発見とモデル化」と連携した成果発表会が開催されているとの

こと（山下ほか（2005））。学部の3年生が間接的に研究発表会に参加してその空気を味わっている。おそらくその中の多くの学生が本学会に入会し数年後には研究発表をすることになるのだろう。そうしてみると、ここ数年の学生会員による発表件数の増加傾向は、今後しばらく続くと予想される。研究発表会の実行委員はますます大変になるのだろうが、これは学会にとってはうれしい悩みというべきか。

能の世界では「守・破・離」の段階を踏んで師の下から独り立ちするのだとか。研究発表会には、これからも若い学会員に成長と自立の機会を与え続けてほしい。

最後にこの場を借りて、データの集計作業を手伝ってくれた石井瞬、岩上恵、長南美奈、藤中恭子（いずれも小樽商科大学社会情報学科）の各氏に謝意を表す。

参考文献

- [1] 大澤義明(2000)：「OR学会会員勤務地の立地分析」, オペレーションズ・リサーチ第45巻第9号, 423-427.
- [2] 山下真, 中田和秀, 後藤順哉(2005)：「平成17年春季研究発表会ルポ」, オペレーションズ・リサーチ第50巻第7号, 501-504.